したものであって，同書の内容や杉本氏の他の著書に関連するものでないことを明記しておく。杉本氏が静岡県を中心に日本フロラの解明に貢献された業績に対しては深く敬意を表するものである。

終りに本文の原稿は前もって杉本氏に送り同氏の諒承をえていることを附記しておく。また杉本氏の「植物界」の発表の基になった標本の一部は東京大学植物標本室(TI)に寄贈され保管されている。私共は今後は有効性が論議されるような出版物は絶無であって欲しいと念願している。

□大日本インキ化学工業ＫＫ(編)：**DICカラーガイド日本の伝統色** 第1版. 283葉. 1979. 同社. ¥3,000. 14×6×4.5 cm (厚さ) の手帖で，一種の Color Fan, 各葉が扇状に拡がるように出来ている。(財) 日本色彩研究所が，日本に今日残っている色名資料に基づいて，上記会社の技術陣をあげて，伝統色を再現して見せたものと云う。選択されたもの260種を，やや厚手光沢のある紙に印刷した。この中には外来名，外来名を訳したものも少数入っている。最初に参考文献を示した1葉と，色名一覧表17葉があり，色彩と全面に印刷した各葉には，色名とそれに当る外国名 (片仮名)，およびその由来その他の短い解説があり，その下に，色の番号. 色名のみを表わす文字が9回繰り返して，横書きに印刷されている。おのおのの間にはミシンが入っていて，9個の巾 1.3 mm の小片に切り取れるようにしてある。使用の時に1片ずつ切り離して用いるようになっているものと思われるが説明にない。あまり言あげせずに，大日本インキの権威において安心して使ってくれということであろうか。各葉の最上端に4行にわたる短かい記号と数字がある。これは上記の色彩研発行の色彩チャートシステム (1972)，同，調査用カラーコード改訂版 (1971) で明かにされたものであろう。採用された色彩名の二三を挙げて見る。孔雀青 (ピーコックブルー)，浅縹 (あさはなだ)，花浅葱 (はなあさぎ)，瑠璃色 (るりいろ，ラピスラズリー)。

この色名帖は全体のふんいきから想像するのに，建築，工芸，工芸的美術の分野での使用を予想したかのようである。しかし，それにしてはやさしい大和ぶりの色名が不似合のようにも思える。大和ぶりの面をかぶった資本主義的色彩攻勢とでも云うべきか。まだ実際には使っていない。筆者は植物の色彩には今では R. H. S. Colour Chart (The Royal Horticultural Society, London) を用いている。しかしこれについている Table of Cross-Reference には，勿論日本の色名はない。興林会出版の色名鑑は Ridgeway: Color Standards and Nomenclature の複製で，日本名が並記されている。とにかく色の記載はむずかしい。　(津山　尚)